牛窓ラボ活動報告書

牛窓五感

ushimado gokan

見て聞いて歩いて
動いて感じた2年間の記録

ushimado.labo

京都大学前田研究室・ココロエー級建築設計事務所

牛窓ラボ活動報告書

牛窓五感

ushimadogokan

牛窓感

ushimado gokan

contents

住み継ぎ調査について —usimado.labo（牛窓ラボ）の 2 年間 …… 3

しおまち唐琴通りと調査対象の分布 …… 5

聞く・語る 『牛窓がたり』と「牛窓読書会」…… 7

歩く・見る・調べる 街並み・空き家調査 …… 13

column 宿泊施設＆レンタルスペース kido がオープン …… 20

聞く・語る 空き家に関するヒアリング調査…… 21

column 気軽に相談できる場をつくる …… 23

手を動かす 空き家解体ワークショップ …… 24

column 牛窓の「ハレ」を知る …… 26

［事例視察］路地に潮風と人の気配が満ちるまち「駒ヶ林」 …… 27

［事例視察］自然発生的なプロセス …… 29

［事例視察］活動を生み出す手段としての空き家活用 …… 31

［事例視察］余白をゆるやかにデザインする …… 33

街の見方を変える フレーム散策実験と展示「うしまど×窓散歩」…… 35

column 牛窓の将来像を考える …… 40

活動の成果と今後の課題 …… 41

あとがき …… 43

ushimado.labo について

ushimado.laboは牛窓地域の調査・研究を行う研究チームであり、住まい・まちづくりの研究・実践をしてきた京都大学大学院人間・環境学研究科准教授の前田昌弘と、岡山を拠点に既存ストックの活用や場づくりの実践を行ってきた株式会社ココロエ一級建築士事務所の片岡八重子が2021年に立ち上げ、活動がスタートした。瀬戸内市との協働事業としてのしおまち唐琴通りを中心とした住み継ぎの調査・研究など、関町に住む岡國太郎氏や瀬戸内市企画振興課の松井隆明氏などと課題を共有しながら、研究室の学生や設計事務所のスタッフと行なっている。

住み継ぎ調査について
――usimado.labo（牛窓ラボ）の2年間

ココロエ　片岡 八重子

しおまち唐琴通り周辺地域の居住環境の全体像を掴むために、２０２２年度は「牛窓を再読（Revisiting）する」という視点で、まち歩きや街並み形成の歴史を学ぶ講演会、住み継ぎインタビュー、空き家の実測・ヒアリング調査を行った。２０２３年度は更に、居住環境の実態を把握するために、関町・西町・本町・東町の空き家調査とヒアリング調査行った。空き家再生の課題と再生手段を探るために開催した空き家ワークショップでは、牛窓特有の地形による課題も浮き彫りになった。２年間の様々なフィールドワークを通して把握してきたこのエリアの居住環境の実態をもとに、４地域に対して行った視察調査では、具体的な課題解決の糸口を見出すことができただけでなく、他地域と比べることでこのエリアの優位性も明らかになった。たとえば、空き家調査では、町内会や地域の団体が空き家についてほとんど知っている地区もあり、場合によっては所有者や後継者、管理人の連絡先まで把握している町内もあった。空き家所有者の連絡先が分からず、苦労している地域が多い中、コミュニティの健在さが地域のセーフティネットになっていることも分かった。また、秋のだんじり祭りに参加させてもらい、地域の文化継承活動の尊さと、祭りのための一連の活動が多世代を巻き込むコミュニティ醸成の鍵になっていることも分かった。それから、ヒアリング調査では、人口が減り、町並みも変わってきたという意見も多い一方、移住者の満足度は高く、コミュニティに積極的に参加していたり、地域の歴史や文化継承に関心を持っていた。

私たちの手探りの活動も２年間で多岐に渡った【左頁表】。活動や調査については「聞く・語る」「歩く・見る・調べる」「手を動かす」「街の見方を変える」という言葉で括りまとめた。またラボに関連した出来事や視察先から得た知見はコラムとして挿入している。穏やかな瀬戸内海の景色を背景に多くの人に話を聞き、路地を歩き、数値データだけでない、我々ラボメンバーの感覚的な部分も多い報告書となっている。

牛窓ラボの主な活動

日時	活動	内容
2021年7月	キックオフ合宿 （2泊3日　参加者12名）	まち歩き、レクチャー、ラボの家具づくりワークショップ
2021年8月	実測調査	関町の空き家の実測調査
	インタビュー調査	住み継ぎに関するインタビュー
2022年3月	瀬戸内市協働提案事業採択	事業名「しおまち唐琴通りの歴史的建造物の住み継ぎケーススタディ」
2022年5月	合同ゼミ	空き家の状況確認、調査報告、課題の共有
	住総研22年度研究・実践助成採択	事業名「歴史的街並みが残る過疎地域の「住み継ぎ」に向けた環境像の共有」
2022年9月	イベント開催	トークイベント「牛窓の街並みを再読する」 三宅理一先生講演会　場所：牛窓テレモーク
	合同ゼミ合宿（2泊3日 参加者21名）	まち歩き、レクチャー、空き家の実測調査、片付け
2022年10月	冊子の発行	インタビューの記録をまとめた『牛窓がたり』第1号発刊
2023年2月	イベント企画・協力	まちなか再生事業（瀬戸内市主催）「牛窓読書会」の開催
	報告書作成	牛窓ラボの活動報告「牛窓再読」の発行
2023年3月	冊子の発行	インタビューの記録をまとめた『牛窓がたり』第2号発刊
2023年5月	冊子の発行	インタビューの記録をまとめた『牛窓がたり』第3号発刊
2023年6月	空き家調査合宿 （1泊2日　参加者12名）	関町・西町・本町の空き家調査
	ワークショップ（参加者12名）	床はりワークショップ
2023年7月	イベント企画・協力	まちなか再生事業（瀬戸内市主催）「牛窓読書会」の開催
	報告会	瀬戸内市市民提案協働事業報告会にて、行政担当者や地域住民に向けて2022年度の活動報告会を実施
2023年8月	ワークショップ（参加者5名）	廃材を使ったクリエイティブリユースワークショップ
2023年9月	視察	神戸市の「まちなか防災空地」　松原永季氏
	視察	「廃屋建築家」西村組　西村周治氏
2023年10月	空き家調査（1泊2日 参加者10名）	東町の空き家調査
	秋祭り	関町のだんじりの曳子としてラボから3名参加
2023年11月	イベント開催	うしまど窓散歩展示　会場:牛窓テレモーク・kido
	ワークショップ	空き家の解体 、残置物の片付け
2023年12月	空き家調査	空き家調査のまとめ
	ヒアリング調査	空き家に関するヒアリング調査
2024年1月	視察	「いんしゅう鹿野まちづくり協議会」小林清氏
	視察	湯梨浜町松崎地区　三宅航太郎氏
2024年1月	イベント協力	まちなか再生事業（瀬戸内市主催）「スタディツアー」
	空き家相談会	kidoにて空き家相談会の開催
	ヒアリング調査	居住者、空き家所有者、移住者へのヒアリング
2024年1月	イベント協力	まちなか再生事業（瀬戸内市主催）「スタディツアー」
	空き家相談会	kidoにて空き家相談会の開催
	報告会	地域住民、空き家調査協力自治会、行政担当者に向けて調査の報告会を実施

しおまち唐琴通りと調査対象の分布

住み継ぎインタビュー対象者の活動拠点

1. ushimado TEPEMOK
2. 備前日生信用金庫 牛窓支店
3. てれやカフェ
4. 牛窓カフェ（現在は前島に移転）
5. 風まち亭
6. sajiya studio
7. ウシマドゲストハウスねんどころ
8. 御茶屋跡
9. 太極拳 樂心舎

ほか、ペンションくろしお丸、山の上のロースタリ（地図範囲外）

実測調査を行った建物

- A 丘の上の二軒長屋
- B 唐琴通りの元米屋
- C 洋風の写真館
- D 路地裏の古民家
- E バス停前の元食堂

- しおまち唐琴通り
- 空き家調査範囲
- 調査地区境界（旧町境界）

聞く・語る

『牛窓がたり』と「牛窓読書会」

京都大学大学院人間・環境学研究科　前田 昌弘
京都大学総合人間学部4回生　今堀 紗里奈

それぞれの活動の背後にある価値観にふれる「語り」

牛窓で地域に関わりながら活動する人たちは牛窓の街のどこに惹かれ、そして、どのような可能性や課題を感じているのだろうか。計12組にインタビューを行った【表1】。

インタビューでは、対象者（以下、語り手）の活動拠点を訪れ、1時間半から2時間ほどかけてじっくり話をうかがった。最低限の質問事項は用意するが、基本的には語り手に自由に語ってもらう（半構造化インタビュー）【写真1】。その際、現在の仕事ぶりや活動内容に加え、そこに至った経緯、活動で特に大切にしていることまで掘り下げて「語り」を引き出すように努めた。今後、牛窓の街が住み継がれていくために、それぞれの活動の背後にある価値観に触れることが大切だと考えたからである。

インタビューで得られた計12組の「語り」は記事としてまとめ、冊子『牛窓がたり』（第1～3号）を発行した【写真2】。冊子のキャッチフレーズは「牛窓の語りを重ね、考える」である。そこには、「語り」を目にみえる形で残すことに加え、今後、街の将来像や住み継ぎの具体策を考える際にこの冊子がコミュニケーションの媒体となるようにという願いを込めた。例えば、『牛窓がたり』第1号に掲載した4組の語りからは共通のトピックとして、「牛窓の特徴・魅力」、「牛窓の可能性と課題」、「牛窓への移住や建物改修の経緯」、「将来への不安と期待」が得られた。

「語り」について語り、街への認識をさらに掘り下げる

さらに、瀬戸内市が進めるまちなか再生推進事業と連携しながら「牛窓読書会」という集まりを企画・実施した。「牛窓読書会」は、『牛窓がたり』を用いた対話の場である。読書会には毎回4組の「語り手」に加え、牛窓で活動する事業者や住民が「読み手」として参加する。語り手の「語り」について参加者が語ることで、「語り」を媒

1	岡 國太郎 さん	牛窓しおまち唐琴通り保存と活性化プロジェクト
2	小林 宏志 さん	ミュージシャン・てれやカフェ・株式会社牛窓テレモーク
3	末藤 功太郎 さん	御茶屋跡
4	小田 聖子 さん	アートデザイナー・株式会社牛窓テレモーク
5	想田 和弘 さん	映画作家
6	谷 美香 さん	ウシマドゲストハウス ねんどころ
7	木下 尚之 さん	焙煎家・キノシタショウテン
8	さかいあつし さん・かよ さん	匙屋＋ sajiya stujio
9	永田 昭二 さん	ペンションくろしお丸・瀬戸内市観光協会
10	大饗信彦 さん・橋本典子 さん・常見和広 さん	備前日生信用金庫牛窓支店
11	相澤 心也 さん	写真家・株式会社牛窓テレモーク
12	小原 悠雲 さん	牛窓カフェ

＊所属・肩書はインタビュー実施当時のもの

表1　『牛窓がたり』第1～3号 語り手一覧

写真1　インタビューの様子（山の上のロースタリにて）

写真2　『牛窓がたり』第1～3号

写真3　「牛窓読書会」の様子（第1回、牛窓テレモーク2階にて）

介として対話を活性化し、牛窓の街への認識をさらに掘り下げることを狙った（リフレクティング・プロセス）【図1】。読書会はこれまで計3回開催し、延べ50名が参加した【写真3】。

読書会での対話において共通の関心となったトピックの例を示す【表2】。特に地元と外の人、移住者の関係について関心が集まっていた。これには、ここ10年ほどみられる牛窓への移住者の増加、港町であり歴史的に移住者がそもそも多いという牛窓の土地柄が影響していると考えられる。また、牛窓読書会のような場があることについて、「近くで活動しているのに意外と交流がなかった人と知り合えた」、「その人の知らなかった一面から牛窓について深く知ることができた」といった感想が寄せられた。具体的な会話の中身からも、互いの視点や街への認識に対する理解が深まっていく様子が窺えた【図2】【図3】。

図1　「牛窓読書会」における対話の流れ

牛窓の魅力や 牛窓の人に対する印象	● 万人受けはしないが、好きな人には刺さる景色。 ● 時間の進み方がせかせかしていない。 ● 道を歩いているだけで話しかけられる。普通の観光地に飽きた人にはその人懐っこさが刺さる。 ● 困っている感じの人がおらず、楽しく暮らすお年寄りが良いロールモデルになっている。 ● 年配の方に個性的な人が多く、「個」が立っている。「都会的」な関わりかたを好む。 ● おせっかいだがシャイで、自分から踏み込み過ぎない面がある。
外から来る人と 地元住民の 考え方の違い	● 地元の人間にとっては普通のこと（通りすがりの人の会話、独特の時間の流れ等）が、外から来た人にとっては新鮮なのだということに気がついた。 ● 外から来た人ほど牛窓を盛り上げようとしてくれるが、地元にはそのような人はいないと感じる。 ● 地元住民と移住者が交流できる場が少ない。同じ地域に住んでいても世界が違うという感覚がある。
地元住民と移住者の コミュニケーション	● まだ混ざり切っていない。コミュニケーションが取れていないので、警戒してしまう。それぞれが個としてありつつ、人となりがわかっていれば繋がりも増えてもっと面白くなる。 ● 移住者としては、地元の人が移住者にしてほしくないと思っていることも知りたい。 ● 外の人だけのコミュニティや活動は長く続かない。地元にとっても必要なサービスや空間を提供すると息の長い存在になるのでは。 ● 牛窓では人を無理に繋ごうとすると逆に離れてしまう気がする。好きなことをしていれば、自ずとつながりは増えていく。
牛窓の現状や 将来のことについて	● 10年ほど前から雰囲気がだいぶ変わった。以前は地元の人があきらめている感じだったが、だんだんと良い方向に変化している。 ● 50年後、100年後に意味が出てくるような活動をしたい。 ● 人口が減ったとしても賑わいがあり行ってみたいと思える場所にしていきたい。 ● 統合するのではなく、人や活動が緩やかにつながりながら情報発信ができるとよい。 ● 住まいの選択肢が少なく、結婚したら牛窓を出ていくという人が多い。一方、いずれ戻ってきたいとい人もけっこういる。
「牛窓読書会」について	● 活動は知っているが接点がなかった人と知り合いになり、その人についてよく知ることができた。 ● 語り手の思いや考え方が自分たちと近しいことを知り、活動の自信になった。 ● 普段は仕事上の話しかしたことのない相手とも立場を取っ払って話ができた。 ● 自分の活動や考え方を言語化することで内省する機会になった。

表2　「牛窓読書会」でのトピックの例

聞き手 A：例えば都会から来られた方っていうのは、この町どうにかせにゃいけんな？みてえなスタンスで来るわけですね。もともと地元にいた人間からすると、そんな上から目線で…何もしてくれんでええ、ほっといてくれってやっぱ思うわけですよね。その温度差を埋め合わすのって大事じゃないかと思いますね。人が思う活性化と、元々いる人たちが思う活性化って違うと思うんです。（中略）うまいことしていかないと結局、（活動を）立ち上げちゃ消え、立ち上げちゃ消えってことがやっぱ起きると思うんですよね。

聞き手 B：結局、今足りないこと、例えば人口が減ってる、過疎化になってる、高齢化なってる、そういうマイナスっていうか、…っていうのは誰も目について…にならんと思うけども、いわゆる住み心地というか、人情があって住心地が良いとかいう部分は全く評価されない。で、なんとかせんにゃということをね。そこのミスマッチがね。だら大変だなと思いますね。僕が戻ったときも、ここで住んで、ここはいいとこなんや、ここに住んで暮らしてええねんっていう自信が起こるというか。（中略）

語り手 C：おっしゃる通りでね。僕は例えば、てんころ庵にて出入りするようなおばあさん達見てると安心するんですよ。いわゆるおひとりで暮らしてる方、80代、90代で暮らされてる方が多いんですけど。大丈夫じゃんって。結構楽しそうに、よくあそこで寄り合って、お互いが家族みたいに気にしあって、で、悲惨な感じが全く無いっていうか。（中略）

聞き手 B：それもある。

聞き手 A：確かに。

語り手 C：僕にとってはロールモデルというか、自分が歳とった時にこんな風に歳が重ねられればオッケーっていう。あと釣りしてるおじさんたちもやっぱり僕にとってはお手本なんですよ。こんな風に毎日好きなことやって、楽しく暮らせればもう、それでオッケーだなって。

聞き手 B：寄り場があって…。

語り手 C：はい、すごく思うんですね。だから僕からするとあんま変わってほしくないんですね、牛窓。この、今が最高っていうか、今がいいっていう風に思うんですよね。ただまあ、問題は、本当に人がいなくなっちゃうと地域として継続できないだろうから、適度に人が住むっていうことは大事だと思うんですけど、だからといって、それこそ活性化って元に例えば大きい施設ができちゃったりとかして、何て言うか、すごく、今と違ってしまうようになってしまったら、むしろ魅力が失われてしまうというか。（中略）だから、どうしたらこう、壊さずに、今の感じを壊さずに、だけどそれが継続できるっていうところが。その辺りがうまくいくとみんなハッピーなのかなっていう感じがするんですよね。

図2　会話の例1：高齢化・過疎化する街への向き合い方

語り手 D：牛窓で言うと、（地元の人と移住者は）混ざりきってないと僕は思ってて。ていうのが隣の人が誰かわからないような、まだ出会ってそんなに間もないんですけど、やっぱりその人の思想がわからないので不安になるというか、警戒しちゃう。（中略）グッと近くなってその人のことがわかれば、それが僕と正反対にいたとしても、そういう人なんだなってわかれば安心できるんですけど。やっぱりコミュニケーション取れてないんで、混ざってない。混ざるって別にぐちゃぐちゃにミックスされるんじゃなくて、点と点がいっぱいバアっとあっていいんですよ。それがちゃんと個として、みんながあの人こういう人だよねっていうのがわかっていけばいいなと。わからない人もたくさんいてもいいんですけど。（中略）

聞き手 E：インスタで毎日発信を見させてもらってるけど、なんか意外にお会いすることがないですね、F さん（＊牛窓に最近移住してきた人物）に。

語り手 D：結構僕会います。お店に来てくれてるのかな。

聞き手 E：わかんない。会ってるけど、たぶん認識してないから。その辺が混ざり合ってないですね。

語り手 D：そうそう SNS では知ってるけどリアルでは混ざってなかったりするので。

聞き手 E:なんか意外にないですよね、きっかけが。私も本当に、ここにおられる方とか、もっと話すきっかけがあればなって思いながら、一歩踏み込むタイミングもなかったり。

語り手 D：そういう町の集まりとか僕も行かないし、彼（＊語り手 D の友人）もあんまり行かなくて、だから逆に来たほうがいいんだろうなっていうので今回も参加させてもらったりしてるんですけども。なんかね、もともと牛窓の人ってあんまり行かないですよ。（中略）G さん（他の語り手）とかも（記事に）書いてますけど、隣町にあんまり興味ないよぐらいな。そんな感じなので混ざり合いにくいね、なんとなく。

聞き手 E：混ざろうとする人に対する抵抗感みたいなのは意外になくないですか？

語り手 D：それはないっす。来られたらウェルカム。でも自分から行かない。

聞き手 E：一歩踏み出す勇気があるかどうかっていう・・・外の者が。

語り手 D：結構おせっかいなぐらい人のことを気にしてるんです。なんですけど自分からは結構シャイな人がめちゃめちゃ多いから行かない。（友人を指して）あの人もああ見えてめちゃめちゃシャイですからね。僕もあれですよ、人と人との繋がりっていうのが大切なんですけど、牛窓の町民性か、人と結びつくことにちょっと拒否感があるんすよ。

図3　会話の例2：「おせっかいだがシャイな牛窓の人」について

歩く・見る・調べる

街並み・空き家調査

京都大学大学院人間・環境学研究科　前田 昌弘

しおまち唐琴通り

牛窓は古くから港を中心として栄えた町であり、なかでも本町、西町、関町は近世の初期には既に町家や商家が軒を連ねる街並みが形成され、特に長い歴史をもつ。また、江戸の後期に開発された東町は、造船、船大工の街として栄え、近年は移住者向けの宅地分譲も行われている。これらの町を貫くかつての牛窓のメインストリートは近年のまちづくり活動の一環として、「牛窓しおまち唐琴通り」と名付けられ、木造建築が軒を連ねる街並み、狭く曲がりくねったヒューマンスケールな空間、通りに沿って点在する社寺や朝鮮通信使関連の史跡等が、牛窓の歴史を現代に伝える空間となっている【5-6頁地図】。

調査の概要

街並みの現状や空き家・空き地の発生状況の全体像を把握するための調査を行った。調査は2023年6月17日・18日（本町・西町・東町）と同年10月21日・22日（東町）の計2回に渡って行い、延べ22名の調査員が手分けして調査範囲内をくまなく歩き、計535軒の建物について目視で確認をしたうえで記録した。なお、調査に先立ち、各町の区長と連絡を取り、事前に調査の趣旨について説明し、了承を得た。以下、調査結果の一部を紹介する。

街並み

唐琴通り沿い、かつ町別には本町・西町、次いで関町で、古くからの建物形式や外観の特徴を残す建物が多く残されており、唐琴通り沿いでも海側に比べ山側のほうが残っている割合がやや高かった【図1】。海側のほうが潮風や高潮等の影響を受けやすく、また、海への眺望が得やすいため、建て替えが進んだと考えられる。

また、そのような歴史的街並みのなかにある空き家が活用されるなどして、近年は併用住宅や店舗も少しずつ増えている【図2】。

空き家について

空き家の割合は全ての町で40％前後と全体的に高かった【図3】。海側に比べ、山側や、唐琴通りからさらに入った狭い路地沿いの敷地の建物は活用や更新がされにくく、所有者による管理も行き届きにくいためか、唐琴通り沿いの海側よりも山側、唐琴通り沿いでないエリアに方が割合が高く【図4】、外壁の不朽や破損、雑草や立木の繁殖が目立つ空き家や建物が目立っていた。

実測調査

唐琴通り沿いの空き家について所有者から許可が得られたものについては順次、実測調査を行い、図面と写真で記録に残している。どれも建築から50年以上が経っており、地域の歴史を物語るような建物である。以下に実測調査を行った記録の一部を紹介する。

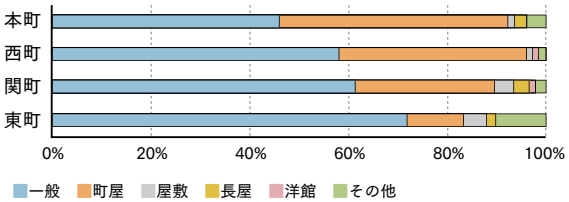


図1　建物種別（町別）
町家・屋敷・長屋という近代以前からの形式の建物が特に多いのは本町であり、次いで西町、関町であった

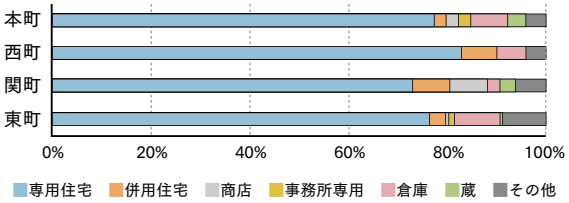


図2　建物の用途（町別）
東町は近代から現代にかけて宅地開発されたエリアも含むためか、町家・屋敷・長屋は少なく、現代の一般形式の建物の割合が他の町より高くなっている。

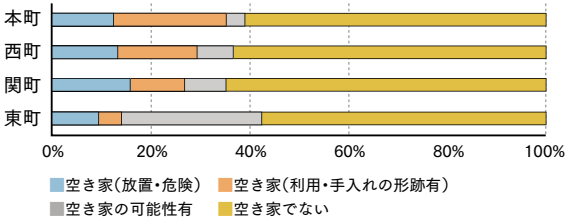


図3　空き家の割合（町別）
空き家の割合は、空き家である可能性があるものも含めると全ての町で40％前後に達している

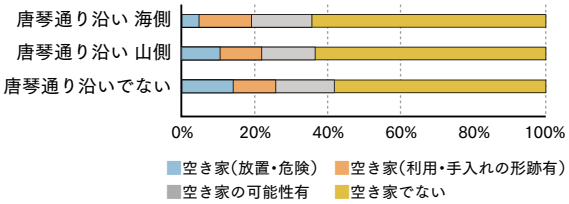
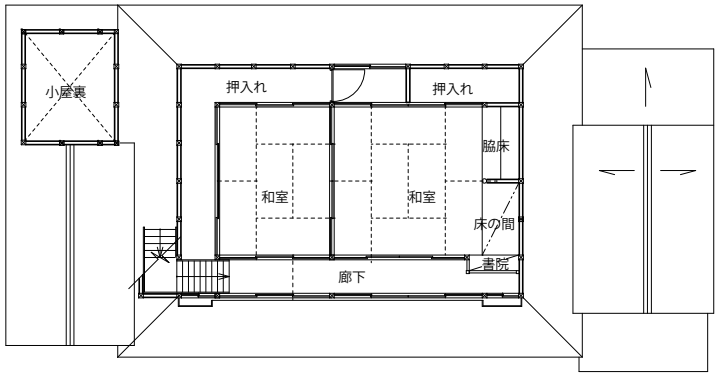
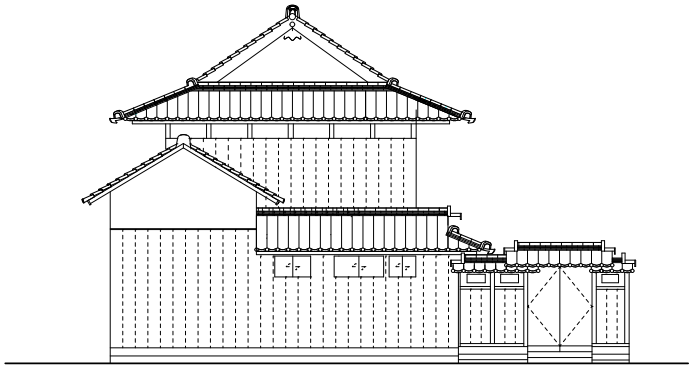


図4　空き家の割合（エリア別）
放置され危険な状態にある空き家の割合が、唐琴通り沿いの海側よりも山側、唐琴通り沿いでないエリアにいくほど増える。

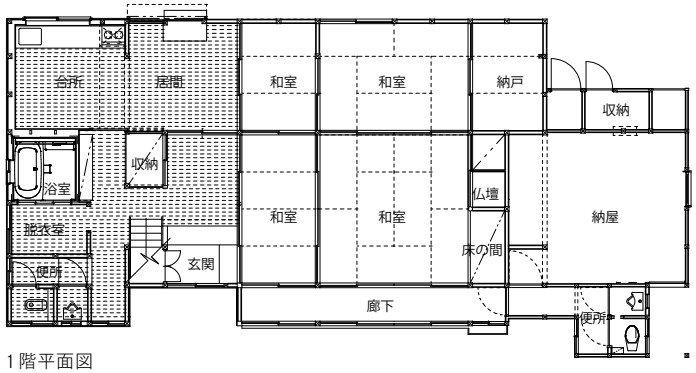
［実測調査］路地奥の古民家



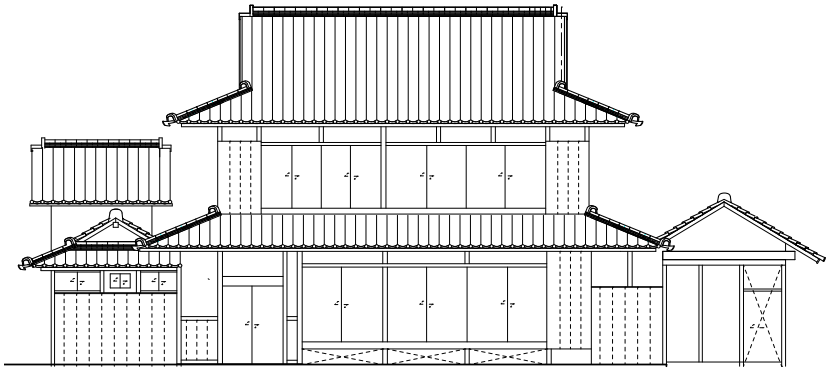
2階平面図



西面立面図



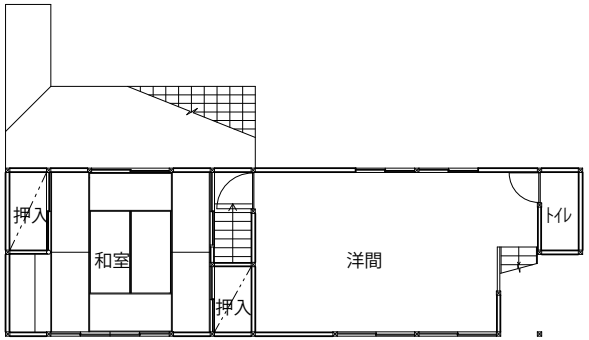
1階平面図



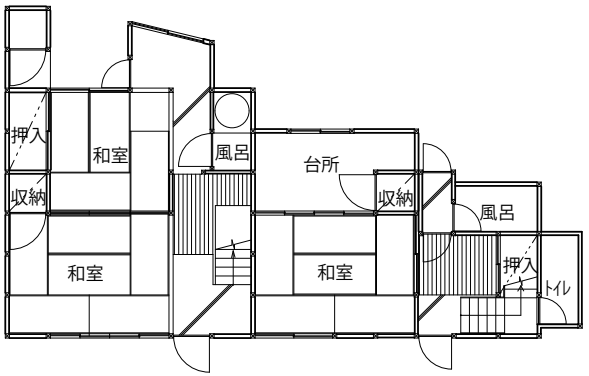
南面立面図

・唐琴通りから路地を奥へと入ったところにある2階建ての民家
・扉に一枚板が使われた木戸が目印である。
・玄関を入ってすぐのスペースは以前は広い土間で、玄関から入って左手も土間の台所や水回りだったようである。
・実測調査時点でも用途は変わらなかったが、生活の利便性から床板が貼られ、台所もシステムキッチンがある現代的な仕様に改修されていた。
・1階の東半分は和室と納戸・納屋があり、家族の日常生活スペースであったと思われる。2階には書院つきの床の間を備えた広めの和室があり、来客時に使用するなど、家の中で最も格が高い部屋（座敷）だったようである。

［実測調査］丘の上の二軒長屋



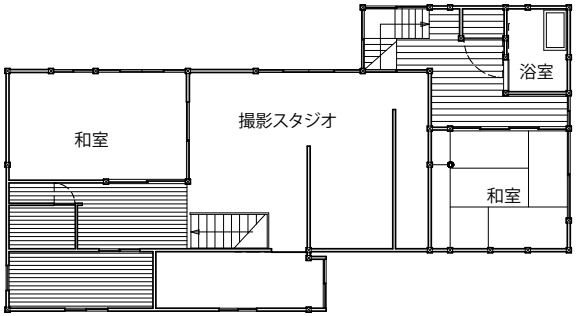
2階平面図



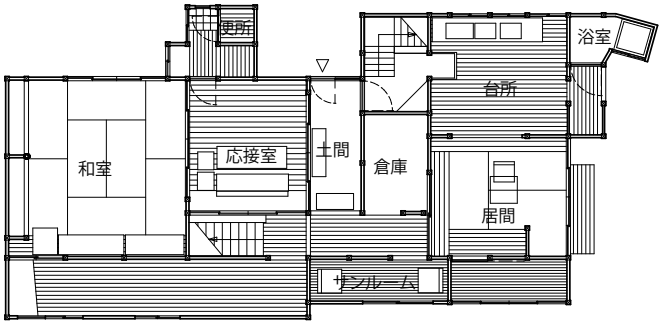
1階平面図

- 唐琴通りから路地に入り、そこからさらに狭く急な通路を上がったところにある2階建ての二戸一住宅。
- 建物の前には庭があり、傾斜地の途中ではあるが見晴らしがよい丘から、瓦屋根の家並みと瀬戸内海に浮かぶ島々を望むことができる。
- 空き家となる前は住居として使われていたようで、土壁の上から貼られたトタンやプリント合板、水回り設備の増設など手が加えられた跡が残っている。
- 背面に竹が生い茂る山が迫っており、特に建物の後方部分の痛みが激しく、水道等の設備もすぐに使用できない状態であるため、また住める状態にするにはかなり手がかかりそうである。

［実測調査］洋風の写真館



2階平面図



1階平面図

- もともと和風の住居兼写真撮影スタジオの建物であるが、外観の一部は洋風である。（唐琴通りから見えている部分（増築）が白い板張りの仕上げられている）
- 入り口は客のプライバシーを守るためか北側の路地に面しており、客はまず1階の待合室を兼ねた応接室に通されたようである。
- 二階は主に撮影スタジオと機材・現像室であり、天井には当時の写真撮影に欠かせなかった自然光を取り入れられるためのトップライトがある。
- 明治初期の建築であり、当時の最先端技術であった写真がこの時代に早くも牛窓で使われていたことや当時の牛窓での写真撮影の様子を伝える貴重な場所である。

column

空き家活用事例

宿泊施設＆レンタルスペース kidoがオープン

継承者を探されていた空き家

牛窓の斜面地沿いの路地に面する、大きな木戸が印象的な、焼杉やお庭が立派な建物。元々の所有者は神奈川県にお住まいで、相続で建物を引き継いだが、管理等も難しいため、建物の継承者を探していた。代々大切に管理してきたからこそ、誰にでもという訳ではなく、材木などをはじめ建築の価値を理解してくれる方にという思いが強かった。そんな折に、縁あって、ココロエ一級建築士事務所にて引き継がせていただくこととなった。

宿泊施設＆レンタルスペースへと改修

元住宅だった建物は、規模が約50坪と大きいこともあり、単身の方でもご家族でも気軽に宿泊できるようなスペース兼飲食店の営業や、出店販売・展示などができるレンタルスペースの複合施設へと改修した。宿泊施設およびレンタルスペースの機能をもたせた理由として大きく2つがある。1つ目は、牛窓ならではの、ゆっくりと流れる時間や豊かな自然、あたたかい人々、重層する奥深い歴史などの魅力に富んだ日常を味わえる場をつくりたいという思いからである。また2つ目は、自己所有の建物が多くを占める牛窓で、牛窓に暮らしてみたい人が暮らせる賃貸住宅や宿泊スペースが求められていたためである。気軽に滞在できる場の存在は、牛窓のような地で代謝を活発にするうえで欠かせない。

オープン

改修工事を経て、2023年10月より正式に運営がスタートした。1泊の滞在から数週間、数ヶ月と中長期の滞在まで幅広く受け入れている。また、レンタルスペースでは、焼き菓子の製造・販売や料理教室などイベントの利用などがされている。今後も、観光と移住を、非日常と日常をつなぐ間のような存在として、地域内外の多様な人々が訪れ、滞在する場所となればと考えている。（ココロエ 増田 里奈）

2階客室
新設した窓からは
牛窓の街並みが臨める

2階客室

1階共有リビング・キッチン
和室を改修し、
宿泊者同士も交流できるスペースとした

kido

施設名称：kido（きど）
住所：〒701-4302 岡山県瀬戸内市牛窓町牛窓3115-1
TEL：070-9233-5351　MAIL：kido@kido.kokoro-e.jp
Instagram：@kido_ushimado

website　Instagram

聞く

空き家に関するヒアリング調査

ココロエ 増田 里奈

空き家が多いにも関わらず、増える移住の需要に対し、住まいの供給や選択肢が非常に少ないという課題の根底にはどんな人々の思いや障壁があるのだろうか。

空き家の割合が高いことが明らかとなった空き家調査の結果を踏まえ、空き家となっている要因やその課題の糸口は何か、また空き家が多い一方で住宅の供給が少ない中で移住した方はどのように住まいを見つけ、どのような課題があるのかを探るべく、ヒアリング調査を行った。

所有者の声から見えたこと

「どうしたらいいか分からないからとりあえずそのままにしておく」と先送りにした結果、空き家になり、廃屋になり、手がつけられなくなってしまう状態に陥る、という全国に普くみられる状況がみえた。「片付けが大変」「誰かわからない人に貸したくない・売りたくない」「解体するのにもお金がかかるので、放っておいた方がいい」「仏壇があるので人に貸せない・売れない」「家族や親族が売却や賃貸に反対する」「もっと高く売れる・貸せると家族や親族に言われる」など様々である。面倒なことを引き起こしたくなかったり、お金に困っていなかったりすることも、行動を妨げている要因として大きい。一方で「〇〇さんには貸してもいい」

ヒアリングの様子

ヒアリング調査でわかったこと

所有者の気持ち

- 片付けが大変
- 家族や親族が反対する
- 誰かわからない人に貸したくない・売りたくない
- お金に困っていない
- 仏壇があるので人に貸せない・売れない
- 解体するのにもお金がかかる

居住者・移住者の気持ち

- インターネットで検索しても、市へ問い合わせをしても、ほとんど物件が出てこない
- 移住者を歓迎するような対応や仕組みが欲しい
- 価格が上昇していてアクセスしづらい

など、信頼のある関係性の上で売却や賃貸するケースや、具体的な引き継ぎ先や解決方法が見えると安心し流動するケースがみられた。

居住者・移住者の声から見えたこと

牛窓を住処として自ら選択し、住まいを探し、現在暮らす方々へのヒアリングから、住まい探しのパターンと課題を以下のように整理した。

①インターネットでの検索
②市への問い合わせ
③家主と直接知り合う

①②のいずれも、供給がほとんどない、情報が出てこないという課題を皆さんが挙げていた。また価格が上昇しており、情報が出てきてもアクセスしづらい状況にあることが分かった。また、移住者を歓迎するような対応や仕組みが欲しいという声も多く挙がった。③は例外のパターンとも言えるが、お試し住宅の滞在期間中に地元の方とつながりができ、住まいを紹介してもらったという例もみられた。ただし、貸してあげたいけれど、家族や親戚の反対により貸してあげられないという地元の方も多くいるようだった。

次世代に引き継いでいくために

牛窓での暮らしを将来に繋いでいくために欠かせない、建物の流動化のためには、所有者など町の人と移住希望者など町外の人とがつながれる場所や仕組みの存在や空き家の流動の事例を伝えていくことなど、空き家バンク登録の促進などよりも前段階の対応が重要であるように感じた。

column

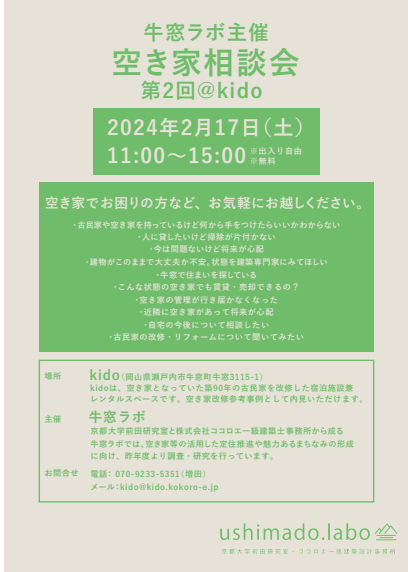
空き家相談会

気軽に相談できる場をつくる

空き家の調査を行う中で、気軽に相談できる場や人が不足している又は見えづらいという課題が見えてきたことを受け、ushimado.labo主催で、無料で気軽に参加できる「空き家相談会」を2回にわたって開催した。

開催場所は、古民家を改修した施設 kido。改修や活用の事例としても参考になればと考えた。建物を資源として捉え、実際の改修にかかる費用や、現時点での建物の状況、それぞれの悩みや事情にあわせた活用の仕方の提案などを行える場とした。

開催した結果、実際に相談に足を運んでくれる人の数は少なかった。「空き家」を入口とせず、より気軽にいけるような機会をつくることや、実際の活動で時間をかけて空き家の活用事例を示し、意識の変化につなげることの重要性を感じ、次の活動への糸口を見出せることができた。（ココロエ 増田 里奈）



空き家相談会チラシ
SNSでの発信の他、調査を行った関町、西町、本町、東町へチラシを配布し周知した。

手を動かす

空き家解体ワークショップ

京都大学大学院人間・環境学研究科前田研究室　修士1回生　山口 ひかる

空き家は放置したままだと朽ちていくが、手を加え整えることでまた住めるようになるかもしれない。牛窓ラボでは、2年間にわたり空き家の解体（内装材の取り外し等）や家財・廃材の片付けを行い、身体を動かしながら解体や片付けの意味について考えてきた。例として、対象建物の一つである「丘の上の二軒長屋」で行った、天井の取り外しついて報告する。

天井を剥がす

２０２３年10月、長屋二階の天井の取外しを行った。この長屋は２０２２年より、家具・建具の片付け、傷みが激しい畳や床板、土壁の上に貼られた板壁の取外し等を行ってきた空き家である。

天井の取外しは、簡単にまとめると、石膏ボードの天井にバールで穴をあけ、地面に向かって引き剥がして落とし、それらを土嚢袋に詰める作業だ。シンプルな作業だが、試行錯誤の連続だ。自分たちの手足を目一杯使って作業することとなった。

最初の一発。バールは上手くボードにかからず、天井全体が少し揺れる。もう一発。今度はヒット。下地の木材を少し避けて、天井に穴が空いた。地面に向かってバールを引っ張る。これを繰り返す。ドカンドカンと穴を開けて、割れた部分をほじくるようにしてボードを落とす。繰り返すうちに、手で剥がせるのでは、と気が

作業開始時の様子

天井の石膏ボードをバールで落とす作業

つく。少し背伸びして、ボードの端に手をかけ、体ごと下へ落とす。そこから作業スピードが格段に早くなった。

パタン、パタン、パタンと小気味良い音をたてて、一枚ずつボードが落ちる。私は床にしゃがみ込み、ガラを拾い集める。気がつくと石膏ボードは全て剥がれ、下地の木材があらわになった。「下地も撤去する?」「ビスも全て外す?」「胴縁は?」「剥がす?剥がさない?」「もうやっちゃいました」など声が飛び交うが、何も決まらないまま昼休憩に入ることになった。

日が少し傾いたころ、作業の続きを行うために長屋に入ろうと玄関の手前で立ち止まった。二階の天井を見上げると、等間隔に並んだ下地の板が、屋根裏に波模様を作っていた。「いい感じですね」と少し話して、作業を再開した。下地板を残すかどうかはわからないが、ついていた煤をはらって、片付けをし、その日は作業を終えた。

解体プロセスを共有すること

空き家改修に際して、どの部分を残し、どの部分を撤去、改修するか。無名の木造住宅の場合、安全性・機能性向上のために補強する箇所以外は、改修する人が自由に判断できる。だが、どうしても作業効率や経済性が重視されがちである。しかし、作業効率や経済性だけでなく、参加者が共有している時間や経験、風景を、空間に織り込むことで効率などとは異なった固有の空間づくりができるのではないだろうか。何度も足を運びたくなるような、ワークショップや設計施工の方法について今度検討してみるのもよいだろう。

作業完了後の様子

column

牛窓秋祭り

牛窓の「ハレ」を知る

「ゆるさ」が魅力の祭り

2023年10月22日に行われた牛窓秋祭りで、だんじり巡行の曳き手として参加させてもらった。牛窓秋祭りは牛窓神社の祭礼である。神社から出発したお神輿が町内各所の御旅所をまわるほか、各町での「しゃぎり」の奉納、そして竜頭、船形のだんじり曳行が行われる。だんじり巡行では、曳き手の男性は化粧を施し、女性の長襦袢を着て、「女装」をする。私も実際に化粧と長襦袢をまとい、地域の方々に混ざってだんじりを曳いた。

お囃子の小中高生（前列中央）と曳き手（後列）

県道を蛇行する関町のだんじり

だんじりの迫力ある姿と、「女装」をした曳き手の滑稽な姿は極めて対照的である。だんじり巡行では、曳き手は力一杯引っ張るという様子もなく、だんじりはゆっくりゆっくりと進んで行く。そんな曳き手の手に力がこもるのが、車通りのある通りを曳行するときである。対向車線に車が現れると、対向車線に大きくせり出してだんじりを蛇行させ、その車を煽るのである。車に向かっていくときの悪戯気に満ちた曳き手の姿は忘れられない。大の大人が童心にかえって徹底的にふざけたおしていた。この祭りには他所のだんじり祭りにありがちな男性の猛々しさの賛美のような雰囲気はほとんど見られなかった。ある種の「ゆるさ」がこの祭りの魅力であろう。

祭り継承の取り組み

このように、一見すると不真面目にも思える祭りだが、牛窓の人々に大切にされていることも随所で感じられた。今年は感染症禍が明け、完全なかたちで祭りを復活させた最初の年であったこともあり、祭りに参加されている方は、やはり牛窓にはこの祭りがなくてはならないという想いを新たにされているようだった。関町では、今年初めてお囃子の笛が地元の中高生の生演奏となった。笛の指導や子どもたちの統率には地域の方があたった。小学生でお囃子を卒業し、祭りへの関わりが薄くなってしまう中高生に新たな役割を与えるこの取り組みは、祭りの担い手育成にもなっている。少子化のなかで祭りを守り継いでいこうとする試みがみられた。

町の少子化が進む現在、この祭りは継続の危機にある。関町では、お囃子の子どもが5人揃うのは、今年が最後かもしれないとの声が聞かれた。様々な面で牛窓らしさが反映されているこの祭りをいかに継承し、牛窓の記憶の場を残していくのかという課題は大変重要なものである。

（京都大学総合人間学部4回生　迎田 暁）

事例視察

路地に潮風と人の気配が満ちるまち「駒ヶ林」

兵庫県神戸市長田区駒ヶ林地区

組織名：スタヂオ・カタリスト　松原 永季氏
組織概要：スタヂオ・カタリストは建築設計の他、都市計画やワークショップ・イベント企画・運営なども手がける建築設計事務所。松原さんは一級建築士・ヘリテージマネージャー等の資格をもつ。
執筆：京都大学大学院人間・環境学研究科前田研究室　修士2回生　石田 純鈴

阪神淡路の被害を免れたまち

長田区は兵庫県神戸市の中南部に位置し、案内していただいた松原さんの事務所は長田区南西部の駒ヶ林地区に所在する。迷路のような細い路地を進むと、風情のある古民家にたどり着く。事務所には喫茶店も併設されており、コーヒーを頂きながらお話を伺った。

阪神・淡路大震災により特に甚大な被害を受けた神戸市長田区の中でも、被害を免れた地区のひとつに駒ヶ林地区がある。そのため震災復興事業からも外れており、今なお細く入り組んだ路地と古風な木造長屋が点在している。

松原さんはこの地に事務所を構えた2005年から現在まで、当事者として駒ヶ林のまちづくりに携わっている。

路地を進んだ先に現れる松原さんの事務所

［案内人］
スタヂオ・カタリスト
松原 永季氏

絶えず意識されているのは、地域の特徴を活かし、住む人の意見を大事にすること。松原さんが地域の方と最初に取組んだ「まちづくり構想」では、

喫茶店も併設する事務所でお話を伺う

まち歩きなどのワークショップを通して地域の方の想いを丁寧に汲みとられた。また構想づくりと並行し、地域名物である「いかなご」を使ったウォークラリーが継続して実施されるなど、その取り組みは唯一無二である。

その後もハード面での取り組みを進められ、震災後に生じた空地を「まちなか防災空地」とする他に、松原さんは細街路を駒ヶ林の守るべき景観のひとつとして捉え、一つ一つの路地に住民とともに向き合われた。その結果、駒ヶ林の特性と住民の意見が色濃く反映された「ひがっしょ路地のまちづくり計画」が完成した。

「まちなか防災空地」。地面に設置された大きな黒板は、災害時には伝言板の役割も果たす

ちょうど人がすれ違えるほどの幅の路地

人の気配を程よく感じるまちなみ

事務所を出て実際に周辺を歩いて回ると、路地の趣は残されつつ、人がすれ違うには十分な広さが確保されている。海に面した広々とした道路から一歩横に入れば、眼前には人の気配を近くに感じる道が続き、松原さんのまちづくりに込めた想いが伝わってくるよう。戦災・震災による被害を奇跡的にまぬがれた駒ヶ林の町並みが今なお受け継がれているのは、決して運の力ではなく、住民と専門家の幾度もの合意形成の賜物であった。この先も新たな風を取り込みながら、ゆったりとした時間が流れ続けて欲しい。

事例視察

自然発生的なプロセス

兵庫県神戸市兵庫区梅元町（バイソン）

組織名：西村組　西村 周治氏
組織概要：廃屋をアーティストや大工、学生など多様な人々の手で自主改修をしている。有機的なマネジメントにより、廃屋を改修する過程で、既存の仕組みや視点、関係性を更新している。蘇らせた建物は売却や賃貸等している。
執筆：京都大学大学院人間・環境学研究科前田研究室　修士1回生　山口 ひかる、京都大学大学院人間・環境学研究科前田研究室　修士2回生　石田 純鈴

「廃屋で遊ぶ」が人をつなぐ

神戸市兵庫区梅元町に位置する村、通称「バイソン」は、神戸市の西村組一級建築士事務所・合同会社廃屋が9軒の空き家を改修・運営しているシェアハウス、アトリエ、レジデンス、茶室の建物群である。幅2～3mほどの公道を挟み、両側に建物が並ぶ。元々、一軒ごとにブロック塀で囲われていたが、それらも西村組の組員によって解体された。

西村組の組員は普段、デザイナー、劇団員、DJなど別の仕事をしていたり、もしくは無職である。そして、大工を本職としている人たちは、西村さんが飲み屋で意気投合したり海外からの旅人だったりと、西村組に集まる人々は年齢も国籍も様々だ。組員はバイソン中央の「AIR」と呼ばれる事務所に集まり、始業時のミーティング、昼の「現場飯」、一日の作業報告などを行っている。

西村組の現場は、クライアントがいない。そして買い取る物件はどれも、廃屋ばかりである。西村組で廃屋を購入、修繕、自らで賃貸に出す、その利益で格安不動産を購入し修繕するというサイクルで廃屋を再生している。家賃を設定していない物件も数軒あり、

道をはさんで植物に囲われた建物が立ち並ぶ

［案内人］
西村組
西村 周治氏

猫に癒されながら西村さんの想いをゆっくりと伺う

過剰な手入れがあえてされていない建物たち

それらの改修費・運営費は補助金（神戸市の建築家との協働による空き家活用促進事業）等を活用し運営している。家賃を設定していない物件を設け、イベントを実施したり、若者やアーティストに場所を提供することで、西村組は「廃屋で遊ぶ」人が人を、廃屋が廃屋を呼ぶような形で、物件数も組員数もこの三年で増加し独自のコミュニティが形成されている。（山口）

ありのままの自然体な空間

昼間に訪れたバイソンの第一印象は、「映画のセット」。日常とかけ離れた、人の気配を感じさせない静けさがそこにあった。日が沈む時間になるとわらわらと戻ってきて、各々、食事の準備をしたり余暇を過ごしたりする。建物も人間もみんな自然体。いつも情報にまみれて無意味な劣等感に縛られている私は、つい自分自身を繕ってしまう。でもここでは、飾ることのないありのままの姿で大丈夫。つい忘れがちな「いま」を、バイソンではつかめそうな気がした。（石田）

事例視察

活動を生み出す手段としての空き家活用

鳥取県鳥取市鹿野町

組織名：いんしゅう鹿野まちづくり協議会　小林 清氏
組織概要：鳥取県鹿野町にて20年以上にわたり地域内の移住支援を行っているNPO法人。空き家バンクの窓口業務、空き家活用、移住支援、サブリース業務、イベント実施など、多くの町外の人が訪れ交流する機会をつくり、過去10年間で120件ほどの移住支援をしている。
執筆：京都大学大学院人間・環境学研究科前田研究室　修士1回生　米澤 脩助

地域にあった最適な仕組みを探る

鳥取県鳥取市鹿野町は、鳥取駅から車で西へ約30分の山間に位置し、長年まちづくりに取り組んでいる旧城下町である。いんしゅう鹿野まちづくり協議会（以下まちづくり協議会）は、2000年「鳥取県街なみ整備コンテスト」にて、鹿野町民の若者主導でつくった計画が最優秀賞となったことがきっかけで設立された。2003年にはNPO法人となり、20年以上活動している。県内外の大学のサテライト研究室も町内にあるなど、学生と連携した活動も盛んである。

統一感のある鹿野の街並み

長年にわたり空き家活用や移住支援、店舗・施設の運営など地域づくりに取り組んできたが、まちづくり協議会で物件はあえて買い取らない。

街に統一感をもたらす瓦屋号と風車

［案内人］
いんしゅう鹿野まちづくり協議会
小林 清氏

まちづくり協議会が運営する飲食店「夢こみち」にて小林さんからお話を伺う

県内外の大学のサテライト研究室が入る元洋装店の建物

所有者と鹿野との繋がりを途絶えさせないために、買い取らずにサブリース（転貸）することが最適なのだという。

10年以上前から、住民に空き家の提供を募っているが、昨年新たに活用できた物件は1件にとどまり、移住希望者に対して空き家が足りていないと小林さんは言う。活用を進めるべく、まちづくり協議会では、所有者が空き家を貸し出しやすい仕組みを生み出した。例えば、空き家の供給を妨げている要因の一つでもある仏壇のある物件について、契約書に「所有者が毎年数回仏壇を拝みに来ても良い」という内容を明記し、所有者が物件を安心して貸し出せるようにしている。また、これまでのまちづくりのノウハウを伝えていくため、県外での講演会やワークショップの開催、まちの課題を解決する企業研修プログラムを鹿野で行うなどの活動にも力を入れている。

人とまちとのつながりを育む支援

今回の視察より、長年の活動による空き家活用の仕組みが鹿野のまちとうまく合致していると感じた。単に空き家を活用するのではなく、人とまちのつながりを第一に考えていることが強みだと思った。だからこそ多くの移住希望者や鹿野とつながり続ける人が絶えないのだろう。学生や地域おこし協力隊との新たな取り組みも計画されているようなので今後の活動も大変楽しみである。

事例視察

余白をゆるやかにデザインする

鳥取県湯梨浜町松崎地区

組織名：MAA、元合同会社うかぶ代表　三宅 航太郎氏
組織概要：2012年に湯梨浜町松崎地区にてゲスト&シェアハウス「たみ」の立ち上げ、運営をしながら移住支援や出店支援を行ってきた。現在は松崎地区で独立しデザインの仕事を行いながら、鳥取県内外のアートプロジェクトなどに関わっている。
執筆：京都大学大学院人間・環境学研究科前田研究室　修士1回生　唐 静雯

人が人を呼ぶコミュニケーション

鳥取県湯梨浜町は、鳥取の中央に位置する人口約1・68万人の町である。今回視察に伺ったのは、JR松崎駅より徒歩2分のゲストハウス兼シェアハウス「たみ」とその周辺である。「たみ」が2012年にオープンして以来、その住民や宿泊者、スタッフであった人々が、湯梨浜町内外に移住した。彼らは「汽水空港（本屋）」や「jig theater（映画館）」などを運営し、新たな人々を惹きつける場所となっている。

町を案内してくれたのは、デザイナーの三宅氏である。「たみ」を立ち上げた一人であり、運営をしながら移住や出店も支援してきた。

「たみ」という名前は、これからの「個」の時代に「民」が集まる場所にしようという思いから名付けられた。国鉄の保養施設であった建物を改修し、1階はカフェ、展示スペース、リビング、キッチン、2階は個室となっている。視察で訪れた日は気温が低く雨が降っていたが、カフェを利用する近隣の住民が多くみられた。三宅氏は、運営や支援するうえで、コミュニケーションを大切にし、空き家所有者の思いに寄り添い、希望や課題を理解した上で外部へ情報発信をしてきたという。その結果、地域外から移住・定住する人へとつながっているようだ。

［案内人］
MAA、
元合同会社うかぶ代表
三宅 航太郎氏

個性豊かな営み

事個性ある古着屋や本屋、映画館、カフェなど、他の地では味わえない色を持つ場所を案内していただいた。例えば、映画館「Jig theater」。東郷湖畔にある廃校を改修し、アーティストやクリエイターが集まる「さくら工芸品工房」の3階にある。運営者である柴田修兵氏はもともと映画好きで、元図工室を改修し映画館にしたという。また、ウェブ制作事務所である元歯医者の建物も訪れた。建物を気に入った方が内装を改修し古着屋を営んでいたが、現在は借主が代わり、事務所として使われている。

力がほどよく抜けた町に点在する特徴的な建物や景観、そしてそれを取り巻く自由な人々が、自分のやりたいことや生き方を実現する手段として、空いた空間を上手く使い、その連鎖がゆっくりと循環している松崎にすっかりと魅了されてしまった。

ウェブ制作事務所（元歯医者）の建物

汽水空港

さくら工芸品工房からの道

さくら工芸品工房の中

街の見方を変える

フレーム散策実験と展示「うしまど×窓散歩」

京都大学大学院人間・環境学研究科前田研究室　修士1回生　天羽生 悠矢

初めて牛窓を訪れる人は、この街並みをどのように体験するのだろうか？　牛窓のありふれた日常風景に潜む魅力を、来街者の目線を頼りに探し出し、地図や写真・映像など色んなメディアを使って住民の方々と共有する場を設けてみるのはどうだろう？　2年間で行った実験・展示実践活動について紹介する。

街並みの魅力を描き出す：実験

「フレーム散策実験」は、牛窓の歩行体験に現れる魅力を幅広く記録することを目的とした被験者実験である。実験では、唐琴通り周辺を一人ずつ2時間程度自由散策し、その間、各自が何かを感じたタイミングで動画を撮影し、その場面について説明してもらうよう依頼した。そうして地点ごとに得られた録音・録画及び位置座標によって参加者の体験を記録した。体験を補助し記録するための道具として撮影器具「フレームカメラ」を考案し、被験者に使用してもらった【図1、図2】。その他、実験に関する概要は表1の通りである。

全ての記録地点を地図にプロットしてみると【図3】、体験は海沿いから山腹の細路まで幅広く分布することが確認できた。実施後に行ったアンケートからも参加者が実験を通して足の赴くままに散策を楽しんだことがわかった【表2、表3】。

図1　実験の様子

図2　フレームカメラ
（オモテ・ウラ）

この散策実験で得られたデータは、被験者それぞれの視点・価値観が反映された記録の集積にとどまらず、連続的な歩行体験を通じて要素が複雑に絡み合うことで生まれる街並みの魅力を表象するものとも言える。「フレームカメラ」を使って視界をフレーミングすることが実験時の空間認識に与えた影響も注目すべきだと感じた。牛窓での空間体験を具体的に記述し、街路空間の魅力に迫る試みとしては更なる分析が必要だ。

記録を共有し、街並みを見直す：展示

実験で得た大量のビジュアルデータは、街を歩く被験者の生の声として見せることで街並みに対する認識や価値観について捉え直すきっかけとなるのではないかと思われた。そこで、展示形式での発表を行い、特に地域内部に向けて共有する場を作ることにした。

メインの展示イベント「うしまど×窓

時期：2022年9月から12月 被験者：20代の大学生や建築士ら計16名。「牛窓のことをもっと知りたい人」という条件で募集した。 被験者居住地：宮城県・千葉県・京都府・兵庫県・岡山県・広島県・佐賀県 天候：晴天（のち曇天・雨天含む）11名、曇天4名、雨天1名 得られたデータ：新鮮な街並み体験が計550地点、5時間超の動画データ（被験者ごとの記録地点数の平均値は34.4で、最大値84、最小値2）

表1　実験概要

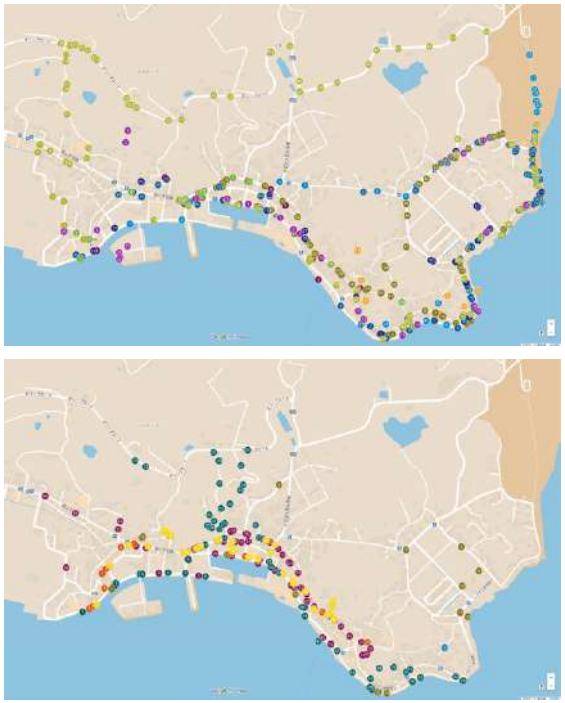


図3　被験者ごとに色分けした記録地点の分布
3－1：No.1～10　　3－2：No.11～16

分類	例
美しいもの	高台からの眺望、夏雲の空、海
風変わりな人工物	船形の住宅、海水浴場のペイント、ヨット形の看板
暮らしの営みを想像させるもの	路傍の祠、住宅の表に置かれた所有物、海に面した建物、猫、何かを燃やす匂い、細い路地
神聖さをもつもの	牛窓神社参道
歴史や過去を想像させるもの	放置された船舶、ホテルリマーニ前の人気の無い幹線道路、風化した看板
身体行動を誘うもの	開放的な直線道路、穏やかな海

表2　ある被験者が見出した魅力的な事象
街並みに喚起される魅力が、美しいもの・風変わりな人工物・暮らしの営みを想像させるもの・神聖さをもつもの・歴史や過去を想像させるもの・身体行動を誘うものと多岐に渡っていた。

	序盤（地点7、8）	終盤（地点43、44）
場所	津島医院ー大浦間	唐琴通り周辺
内容	古民家の並びに違和感 内陸部はまるで山奥の村のよう 牛窓はリゾート地と聞いていたのに…	雑多な雰囲気に生活感 道端の祠は海上安全祈願か？ 住民の生活の歴史に思いを馳せた

表3　ある被験者の記録内容の遷移
山側から海側への歩行を通じて、牛窓はリゾート地だという先入観が徐々に解きほぐされ、歴史的な重層性を持つ生活の場として捉えるようになる様子も確認された。

展示の様子

kido会場では、一風変わった街の見方を展示で伝え、牛窓の日常風景にこそ注目すべき価値があると伝えることを主眼に展示を行った。また、牛窓での活動を通して制作した写真作品の展示も行った。

展示には2会場合わせて約50人が来場した。各会場にはスタッフを配置し、会場での聞き取りも行った。来場者には、実験で使った「フレームカメラ」を模したフレームを渡し、会場間を移動しながら「フレーム散策実験」を模擬体験してもらうことで、被験者の歩行体験に対する想像を刺激した。来場者のうち39人からアンケートおよび感想を回収できた【表4、図5】。アンケートより、牛窓外からの来場者の割合が高いことが分散歩REWATCHING USHIMADO」は、2023年11月18日・19日の2日間、牛窓テレモーク・中長期滞在&レンタルスペースkidoの2箇所分散展示の形での開催となった。

テレモーク会場では、撮影画像と発言データを被験者ごとにプロットした16枚の地図や実験時の様子を音声付きで視聴できる映像、そして特大サイズの白地図を用意し、牛窓の気になる場所を来場者が自由に書き込んで交流できるようにするなど、実験における歩行体験のリアリティが感じられるような工夫を加えた展示を行った。

図4　展示した散策ルート地図の一部

	展示を通じて新しい価値観に触れた	実験と展示について	被験者のまなざしについて	移住者同士で共有される感覚
牛窓及び周辺地域在住者 施設・行政等関係者	・普段気に留めていなかった所を取り上げた記録を見て、客観的に牛窓の魅力に気付く機会になった ・見慣れた景色も切り取ることで新感覚の情景になることに驚き ・異世界への入り口を探しているような感じがした ・多様な視点を実体験できたひとときだった	・こうした展示がきっかけでこの町のことを考える人や機会が増えていくことがとても大きな価値だ ・この実験の試みがマップ作りなどのアクティビティになりそう ・まちづくりや牛窓の将来に活かそう ・幅広い層（年齢・地域在住 / 非在住）の被験者での実験結果が見てみたい	・各被験者の感想が優しく、牛窓を見守ってくれている感じがした ・同じ場所でも人によって見え方・注目点が様々であることが面白かった	・自分も家族も牛窓に魅力を感じて移住してきたが、やっぱり多くの人にとって魅力的だということがわかって嬉しかった ・移住者として移住初期の気持ちを思い出し、懐かしく大事に思った
その他来場者（観光等）	・この町を歩いたことがなくてもなんだかわかった気になった ・街に馴染んでいる光景の一つ一つに改めてしっかりと目を向けることで発見や疑問があり面白かった	・複数人の記録地図を並べて展示することで、歩ける道が可視化されてよい ・被験者の偏りが気になる。地元の人が実験をやった結果が見たい ・SNS 的な情報共有・交流がリアルに行われている点、親しみやすさと新しさを同時に感じられる ・演出意図のない生のまちの姿とリアクション、主観による印象が見聞きできて面白かった。 ・自分が何に注目しながらまちなみを見て、その中から何を記録に残しているのか考える機会になった	・人のクセ、先入観が新たな土地の見え方に影響し、連続的に注目点が増えていく様子があった ・被験者の言語化力に驚いた。普段へぇーで終わってしまうところをフレームを持って言葉にしながら歩くのもいいと思った	・（該当なし）

表4　来場者の感想（アンケートより要約・抜粋）

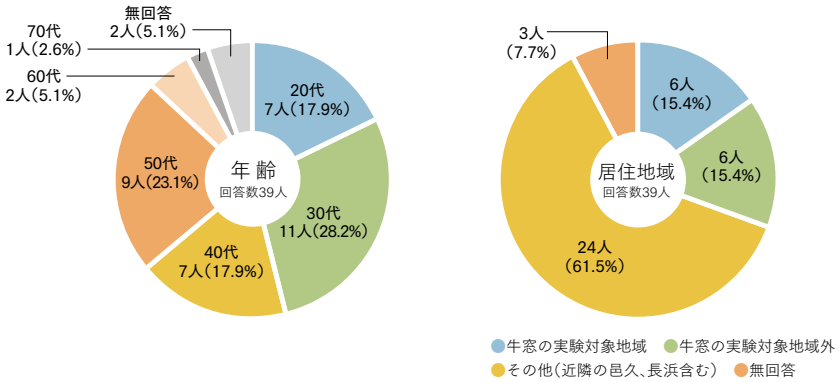


図5　来場者アンケート結果　6－1：来場者の年齢　6－2：来場者の居住地域

かった。地域在住者は、ほとんどが在住歴10年未満の移住者だった。地域住民からは、多様な視点を実体験できたという鑑賞姿勢に関する回答や、住み慣れた街を俯瞰し魅力を再発見したという回答が複数みられた。他人の体験記録の鑑賞を通して新たな価値観が芽生え、街並みに対する新しい視点を獲得しつつある様子が窺え、展示行為自体への大きな共感も得られた。

これまでの実践活動を終えて：感想

展示については、当然ながらこの規模感でのイベント主催は初めてで、企画・運営・宣伝・制作を一人で行うのはとても大変だった。両会場や岡氏の助力もあり、なんとか間に合わせることができた。展示前日はラボメンバーの助けを借り、廃材を活用しながら会場を設営した。今こうして振り返ってみると、初の試みとしては大成功を収めることができ、こんな挑戦を迎え入れてくれる懐深さは間違いなく牛窓の地域としての強みであると言える。

展示終了後、牛窓テレモークのご厚意により、会場をテレモーク1階に移して延長展示を行うことになった。今後、テレモーク関係者や地域の声を聞き取り、一連の実験・展示が牛窓で果たした「街の見方を変える」役割について考察をより深めていきたい。

「うしまど×窓散歩」展示チラシ

column

2023年度まちなか再生事業

牛窓の将来像を考える

瀬戸内市が2017年度から実施している「牛窓リノベーションプロジェクト（牛窓まちなか再生推進事業）」。牛窓の未来をまちの人々で考え、将来像を描くため、今年度は”牛窓らしさを「語る」・「受け継ぐ」・「つなぐ」”をテーマに、「牛窓らしさ」を複数の視点から紡いでゆくための場が設けられた。牛窓ラボでは規格の一つであるスタディーツアーのコーディネートなど、サポートを行った。

牛窓スタディーツアーの様子

牛窓を語りを通して知る、スタディツアー

牛窓で暮らす人、働く人、訪れる人、それぞれが感じたことや想い出を共有し、共に「牛窓らしさ」を探求するスタディーツアーを全4回にわたって開催した。テーマは①唐琴通りの街並みや歴史②教育・文化③港町としての風景や生業④公共空間や低未利用地の利活用とこれからとした。20代から80代まで、多様な参加者とともに、語り合いながらテーマに沿って町を歩いた。

牛窓テレモークに牛窓資料室を開設

旧牛窓診療所を活用し2021年に開館した「牛窓テレモーク」の一角に、資料室兼ツアー事務局を設け、資料の収集や編纂、ツアーの発信などを行った。地図や絵葉書、写真、本など、多くの資料が牛窓の人々の協力のもと集まった。自分たちのまちに誇りと愛着を持ち、語りに溢れている、そのこと自体が「牛窓らしさ」であり、未来につながる原石であるように感じられた。

牛窓テレモーク1階に開設した「牛窓を知る・考える資料室」

将来に繋いでいくために

今年度実施したスタディーツアーや資料室等で得られた情報や課題、可能性について、①散策マップ・資料目録の発行、②牛窓ビジョンブックの発行の2つの形でまとめ報告を行う。次年度以降の、より実践的な動きへとつなげていくことを目指している。

（ココロエ　増田 里奈）

活動の成果と今後の課題

京都大学大学院人間・環境学研究科　前田 昌弘

この2年間のushimado.laboの活動を通し、見えてきた可能性と課題、そして我々の組織の限界を以下のように整理した。

まず成果として、主に以下の三点があげられる。一つ目は、牛窓で地域に関わりながら活動するプレイヤーへのインタビューを通じて、住み継ぎにむけた牛窓の魅力と価値を掘り起こしたことである。二つ目は、行政や住民組織（自治会）の協力を得て、組織の垣根を超えて空き家等の情報にアクセスし、実態を把握することができたことである。三つ目は、空き家の事例分析、空き家の所有者や活用者へのヒアリング等を通じて、危機意識の持ちづらさや親族間での合意形成の難しさなどの空き家の放置の理由や改修費用の相場等専門知識のニーズや費用捻出の難しさといった住み継ぎの具体的な課題を整理したことである。そして、これらの成果を踏まえ、空き家再生支援や支援組織の必要性など施策を提案した。

一方で、空き家の調査や相談会の実施に際し、個人的な営利のためと見られてしまう場合もあり、現在のラボの体制では、アプローチできる所有者や得られる情報に限界があることも確かである。調査の先にある実働部隊としての役割を担ううえでも、ラボの活動に対する、公平性や信頼性に課題があると感じた。今後、活動の先にある実働の部分をラボが担ううえで、関係者と密にやりとりをしながら活動を専任で動かしていける人材が必要であるが、それを支えるためにラボの体制の整備と収益・予算の確保、地域からのさらなる理解・協力、行政による公的な支援を得ることが課題である。

あとがき

この2年間、ushimdo.laboとして色々と活動してきましたが、牛窓の街、特にしおまち唐琴通り沿いの建物や歴史、人、暮らしの文化について、まだまだわからないことが多いなと感じます。牛窓の街には港を中心に昔から多くの人や物が行き交い、様々な出来事の記憶が場所や街並みに刻まれ、それらが地層のように幾重にも重なっている。だからこそ、知ろうとすればするほど、どんどん新しいことがでてくる。牛窓はそんな歴史と文化の奥行きを持った、街なのだと思い知らされました。

特に牛窓の街の文化についてはもっと多くの人に知られ、継承の方法について考える機会が必要なのではないかと思います。たしかに、朝鮮通信使関連の史跡や行事、秋の祭礼とだんじり巡航、文人・芸術家が残した数々の作品などは牛窓の文化として知られています。しかし、それ以外にも郷土料理や生業、暮らしに関わる無名の文化がたくさんあり、それらも街の魅力を構成する欠かせない要素です。

古い建物や街並みにしても、いわゆる文化財にならなくても、そこに暮らしてきた人たちの記憶と文化の器として、十分に残す価値があります。しかし今、多くの建物が空き家や空き地となり、どんどん失われています。牛窓の場合、都市部からの移住希望者が近年絶えないのは救いですが、建物が活用されさえすれば文化が継承されるわけではありません。今回の報告書で提案した、空き家活用を支援する人材・組織の確保に加え、牛窓ならではの文化を継承する方法についてもぜひ一緒に考えて頂きたいです。（前田昌弘）

この2年間の活動を通して、たくさんの学びを頂きました。調査にご協力を頂いた皆様には本当に感謝致します。活動を通してお会いした牛窓に関係する方々が、この町に愛着や関心を持ちながら暮らしていることが、とても心地がよく、正直この町に住みたいなと思うようになりました。ご縁があって関町の古民家を、私が主宰する建築設計事務所で譲り受け、改修工事を終え、２０２３年10月に「kido」を開設いたしました。レンタルスペースを持つ宿泊施設です。外モノの視点から、住人の視点も加わり、牛窓に暮らす豊かさを味わうとともに、暮らし続ける課題にも直面しています。

さて、今年度は調査に加え、制度、活動、組織、デザインなどの手法を参考にしたく、４つの地域に事例視察に行きました。空き家、過疎化、不便さ、未接道や再建不利立地など、牛窓と共通する課題を持ちながら、逆手にとったような取り組みは、その地域の特性を熟知しているからこそ生まれ、独自性が強く、地域の未来を切り開く活動でした。牛窓で「人が減ったから何もできないよ」という言葉をよく耳にしますが、「人が少ないからできること」×「牛窓らしさ」が他にはない景色をつくるのではないかと思います。今後は具体的なアクションを考えていきたいと思います。（片岡八重子）

牛窓ラボ活動報告書

牛窓五感

発行日　令和6年2月28日

編集　ushimado.labo

執筆　前田 昌弘・片岡 八重子
増田 里奈・今堀 紗里奈・山口 ひかる・迎田 暁
石田 純鈴・米澤 脩助・唐 静雯・天羽生 悠矢

デザイン　TAU GRAPHIC　江竜 陽子
イラスト　おおもり のりこ
図面作成　片岡 八重子・澤田 倭芳那・河村 南

発行　ushimado.labo

この冊子は、令和5年度瀬戸内市共同提案事業（事業名：しおまち唐琴通りの歴史的建造物の住み継ぎケーススタディ）の助成を受けて活動した成果をまとめたものです。